第4問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（設問の都合で送り仮名を省いたところがある。）（配点 50）

大観末、魯公(注1)責(注3)宮祠帰浙右(注4)。吾侍公舟行、一日過新開湖、睹漁艇往還上下。魯公命吾呼得一艇来、戯售魚可二十鱞(注7)。小大又弗斉。問其直、曰、「三十銭也。」吾使左右如数以銭畀之焉。

去来未幾、忽遥見槳艇(注8)甚急、飛趁大舟矣。吾与公咸愕然謂、「此必得大魚乎。将喜而復来邪。」頃已及、則曰、「始貨爾魚約三十銭也。今乃多其一。用是来帰爾。」魯公笑而却之。再三不可。竟還一銭、而後去。魯公喜。吾時十四矣。白魯公、「此豈非隠者邪。」公曰、「江湖間、人不近

市廛(注9)ニ者類如レ此。」

吾毎ニ以思レ之。今人ノ被ニ朱紫(注10)ヲ、多キモ道ニ先王(注11)ノ法言ヲ、号シ士君子ト、又従ヘニ騶哄(注12)、坐シテ堂上ニ、曰フモノ貴人ト、及ベバ一タビ触レ利害ニ、校ブルニ秋毫(注13)ヲ、則チ其ノ所レ守ルヲ、未ダ必ズシモ能クハ尽セ附ニ新開湖ノ漁人ニ也。故ニ書ス。

（蔡絛『鉄囲山叢談』による）

（注）

1 大観――宋代の年号（一一〇七～一一一〇）。
2 魯公――筆者蔡絛の父、蔡京。
3 責ニ宮祠ニ――祭祀の任を担う。高官を退いた者があたるが、実際の職務はない。
4 浙右――浙江（銭塘江）の西の地域。筆者の父の隠居所がここにあった。
5 新開湖――現在の江蘇省高郵にあった大運河沿いの湖。
6 漁艇――小型の漁船。
7 鱟――ひれ。魚を数える助数詞。
8 槳艇――櫓で漕ぐ小舟。
9 市廛――商店のある街。
10 朱紫――高位高官の者が身につける服。
11 先王法言――昔の聖王の遺した、のっとるべき言葉。
12 騶哄――貴人を先導する従者。さきばらい。
13 秋毫――わずかなもの。

問1　波線部(ア)「約」・(イ)「道」と同じ意味で用いられている語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 27 ・ 28 。

(ア)「約」 27
① 要約　② 節約　③ 倹約　④ 誓約　⑤ 簡約

(イ)「道」 28
① 人道　② 報道　③ 道理　④ 道程　⑤ 道具

問2　傍線部A「吾使二左右如一数以一銭畀一之焉。」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① 私は行き交う漁師たちに適正な値段をつけさせ、お金を渡した。
② 私は傍らの漁師に魚の大小に応じて値段をつけさせ、お金を渡した。
③ 私は傍らの漁師に魚の数に見合っただけの値段をつけさせ、お金を渡した。
④ 私は傍らの従者に命じ、求められた金額どおりお金を渡させた。
⑤ 私は傍らの従者に命じ、魚の数と大小とを考えあわせてお金を渡させた。

問3　傍線部B「始貨二爾魚一約三十銭一也。」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 30 。

① 始め爾に魚を貨るも三十銭に約せんや。
② 始め爾の魚を貨るに三十銭を約せんや。
③ 始め爾に魚を貨るに三十銭を約するなり。
④ 始め爾に魚を貨らしむるに三十銭を約するか。
⑤ 始め爾の魚を貨らしむるも三十銭に約するなり。

問4　傍線部C「魯公喜。」とあるが、魯公の気持ちの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31 。

① 一尾足りなかったと言い、わざわざ魚を届けてくれた漁師の殊勝な心がけに感動した。
② 一尾多く渡してしまったと言って魚の返品を求めた漁師に、かえって生真面目さを覚え感心した。
③ 一銭足りなかったと言って取りにきた漁師と争ったが、自分の誤りに気づき、正しく支払うことができて安心した。
④ わざわざ追いかけてきた漁師が、値をつけるのが一銭高すぎたと言ってお金を返していったことを、得したと思った。
⑤ 一銭多くもらったから届けにきたと言い、要らないと断っても、律儀に余分なお金を返していった漁師に好感がもてた。

問5　傍線部D「此 豈 非二隠 者一邪。」とあるが、当時年少であった筆者がこのように言ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

① 金銭に関して潔癖で、人の好意に甘えず実直に生きる漁師が、利欲とは無縁の高尚な人物に見えたから。
② 繁華な都会から離れて湖で質素に生活する漁師が、反骨精神にあふれた孤高な人物に見えたから。
③ 生業にいそしむ漁師とはじめて身近に対話したところ、その話し方は飾り気がなく、純朴な人物に見えたから。
④ 昔の聖王の言葉にしたがって湖上に暮らし、利害関係の渦巻く市場に近づかない漁師が、清廉な人物に見えたから。
⑤ 高官を退いた父と湖に遊んで悠然とした気分になり、湖上で自由な生き方をする漁師が風流な人物に見えたから。

問6　筆者は、この新開湖での出来事に触れながら、どのようなことを言おうとしているのか。最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① 当節の高官の中にも、わずかな利害にとらわれず節操を守ることのできる者がいて、彼らは新開湖の漁師のような隠者と心を通じ合える、ということ。
② 当節の高官の中には、わずかでも利害がからむと節操を守ることのできない者がおり、彼らは新開湖の漁師に及ばない、ということ。
③ 当節の高官の中にも、わずかな利害にとらわれず節操を守ることのできる者がいて、彼らは新開湖の漁師にまさる、ということ。
④ 当節の高官の中には、わずかな利害にさとく了見の狭い者が多いので、彼らは新開湖の漁師のような隠者とは心を通じ合えない、ということ。

⑤　当節の高官の中にも、わずかな利害にとらわれず昔の聖王の言葉を守っている者がおり、彼らは新開湖の漁師に劣りはしない、ということ。

よみ

大観の末、魯公宮祠を責めて浙右に帰る。吾公に侍して舟行し、一日新開湖に過り、漁艇の往還上下するを睹る。魯公吾に命じて一艇を呼び得て来たらしめ、戯れに魚を售ふこと二十蠶ばかりなり。小大又た斉しからず。其の直を問へば、曰はく、「三十銭なり」と。吾左右をして数のごとく銭を以つて之れに畀へしむ。

去り来たりて未だ幾くならざるに、忽として遥かに桀艇の甚だ急に、飛びて大舟を趁ふを見る。吾と公と咸愕然として謂ふ、「此れ必ず大魚を得たるか。将に喜びて復た来たらんとするか」と。頃くして已に及べば、則ち曰はく、

B「始め爾に魚を貨るに三十銭を約するなり。今乃ち其の一多し。是を用つて来たりて爾に帰す」と。魯公笑ひて之れを却く。再三なるも可かず。竟に一銭を還し、而る後去る。魯公喜ぶ。吾時に十四なり。魯公に白す、「此れ豈に隠者に非ずや」と。公曰はく、「江湖の間、人の市廛に近づかざる者類ね此くのごとし」と。

吾毎に以つて之れを思ふ。今の人の朱紫を被るは、先王の法言を道ひて、士君子と号し、又た騶哄を従へ、堂上に坐して、貴人と曰ふもの多きも、一たび利害に触れ秋毫を校ぶるに及べば、則ち其の守る所、未だ必ずしも能く尽くは新開湖の漁人に附せざるなり。故に書す。

通釈

宋の大観年間の終わり頃、わが父魯公は祭祀の任を担って浙右の地に帰った。その時私は父に随行して舟に乗っていたが、ある日新開湖を通過したときに、小さな漁船が賑やかに行き交うのを見た。魯公は私に命じて一艘の漁船を呼び寄せ、旅の気まぐれに魚を二十尾ばかり買い求めた。魚は大小とりどりで、一様ではなかった。値段を尋ねると、「三十銭です」と答えた。私は傍にいた従者に命じて、要求どおりの金額を払わせた。

その漁船が立ち去ってまだ幾らも経たないのに、突然一艘の櫓で漕ぐ小舟が、遥かかなたから、飛ぶように急いで私たちの大きな船を追って来るのが見えた。父も私も、他の者も皆驚いて、「これはきっと大きな魚を手に入れて、喜んでもう一度我々のところに来るのかもしれない」と言った。やがて（小舟が）私たちの船に着いてこう言った。「初めあんたがたに魚を売るときに、三十銭と取り決めた。だが実際には一銭多かった。だから、あんたに返すためにここへ持って来た」と。魯公は一笑して、要らないと何回も言ったが、相手は聞き入れず、とうとうその一銭を私たちに返して立ち去った。魯公はこのことに大満足であった。私は当時十四歳だったが、魯公にこう言った。「今の人は隠者ではないでしょうか」と。公は「人里離れた川や湖のほとりで、商店のある街に近づかない連中は、えてしてこういうものだ」と答えた。

私は常々こう考える。今の世の中で、朱や紫の高官用の衣服を身に着け、昔の聖王の名言を口にし、士だの君子だのと称して、従者を引きつれ、宮廷の椅子にでんと座って、おれは貴人だと言う者は数多い。しかし、そんな連中も、いったん、こと利害に絡まれて、その利害の大小を比べる段になると、その節操が新開湖の漁師の節操に全くひけを取らないとは、必ずしも言い切れない。そういうことを言いたいために、この話を書いたのである。

第4問 (50)	問1	27	④	5
		28	②	5
	問2	29	④	8
	問3	30	③	7
	問4	31	⑤	8
	問5	32	①	8
	問6	33	②	9